

「し」の識別 確認テスト（古典文法） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 ウ（副助詞）。「文し来たりて」の「し」は強意・語調を整える副助詞。直前の「文」は名詞であり連用形ではないので過去の「き」ではない。取り除いて「文来たりて」としても文意が通じることが決め手。

問2（訳例）昨日、都から手紙が来て、母の安否を知った。（「し」は強意の副助詞で、訳には特に表さない。）

問3 直前の「出でて」が下二段動詞「出づ」の連用形（+接続助詞「て」）であり、連用形を受ける「し」は過去の助動詞「き」の連体形だと判断できる。さらに下の体言「人」に連なっている点も連体形である根拠となる。

問4 (1) 四段動詞「入る」の連用形。(2) 体言「月」（「入りし月」）。連用形「入り」を受け、下の体言「月」に連なるので過去の助動詞「き」の連体形である。

問5 「美し（うつくし）」は語幹「美（うつく）」に活用語尾「し」が付いた一語の形容詞（シク活用）であり、「し」だけを切り離して助動詞や助詞として扱うことはできない。直前が連用形でない（語幹に直接続く）ことから活用語尾と分かる。

問6（訳例）旅の空の下で、故郷が恋しかったことだ。（「ぞ〜ける」の係り結びに注意。「恋し」はシク活用形容詞。）

問7 「し」を取り除いて「風だに吹かば」としても文意が変わらず通じるため、強意・語調を整えるだけの副助詞だと判断できる。直前が連用形「吹き」ではない点も過去の「き」でない根拠となる。

問8 体言「歌」（「詠みし歌」）。連用形「詠み」を受けて体言「歌」に連なる連体形。

問9 「し」を取り除いて「一人居れば」としても文意が通じるため、強意の副助詞だと判断できる。直前の「一人」が名詞であり連用形でないことも根拠となる。

問10 「逢ひし夜」の「し」は、連用形「逢ひ」を受け、下の体言「夜」に連なっている。体言に連なる形であることから連体形であると分かる。

問11（訳例）都で見た桜を、この里でも探し求める。（「見し」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形で「見た」と訳す。）

問12（訳例）あなたが植えた松。ここでの「し」は過去の助動詞「き」の連体形で、「植ゑ」は下二段動詞「植う」の連用形。下の体言「松」に連なるため連体形である。

問13 ア（過去の助動詞「き」の連体形）。直前の「出でて」は下二段動詞「出づ」の連用形+接続助詞「て」で、その下の「し」が連用形を受けて体言「人」に連なる連体形となっている。

問14 ア（過去の助動詞「き」の連体形）。「入り」は四段動詞「入る」の連用形。下の体言「月」に連なる連体形。

問15 イ（形容詞の活用語尾）。「美し（うつくし）」はシク活用形容詞で、「し」はその終止形の活用語尾。ここは係助詞「こそ」を受けて已然形「美しけれ」となる一部分。語幹「美(うつく)」＋活用語尾の関係であり、独立した助動詞・助詞ではない。

問16 イ（形容詞の活用語尾）。「恋し」はシク活用形容詞「恋し」の語の一部（語幹「恋」＋「し」）。下に「かりける」と続き、形容詞の補助活用（カリ活用）になっている。

問17 ウ（副助詞）。「風だにし吹かば」の「し」は強意の副助詞。直前は副助詞「だに」で連用形ではない。「風だに吹かば」と取り除いても文意が通じる。

問18 ア（過去の助動詞「き」の連体形）。「詠み」は四段動詞「詠む」の連用形。下の体言「歌」に連なる連体形。

問19 ア（過去の助動詞「き」の連体形）。「降り」は四段動詞「降る」の連用形。下の体言「雨」に連なる連体形。

問20 イ（形容詞の活用語尾）。「寂し（さびし）」はシク活用形容詞。「し」は語の一部であり、ここでは「寂しさ」（形容詞の語幹＋接尾語「さ」）として名詞化している、その語幹を構成する部分。助動詞・助詞ではない。

問21 ウ（副助詞）。「一人し居れば」の「し」は強意の副助詞。直前の「一人」は名詞で連用形ではない。「一人居れば」と取り除いても文意が通じる。

問22 ウ（副助詞）。「名にし負はば」の「し」は語調を整える強意の副助詞で、取り除いた形は「名に負はば」。直前の「名に」は名詞＋格助詞であり連用形でないことから過去の「き」ではないと分かる。

問23 連用形。（過去の助動詞「き」は連用形に接続する。）

問24 シク活用。（「寂し」「恋し」はいずれもシク活用形容詞。）
